

Salut

ful 2

麻生院寺町倶楽部のニュースマガジン「サリュ」通巻55号2008年冬・春号



ほとけの物差しは目盛りのない物
差しです。わたしはそう考えてい
ます。目盛りがないから、その物
差しで測ると、みんな同じになっ
てしまいます。つまり、頭のいい
子もすばらしい、あまり勉強ので
きない子もすばらしいのです。二
人は同じになります。美人もすば
らしい、不美人もすばらしい。勤
勉な人間もオーケー、怠け者もオ
ーケー。金持ちもいい、貧乏人も
いい。健康な人もいい、病人もい
いのです。いや、生きている人も
いいが、死んでいる人もいいので
す。それがほとけさまの物差しで
す。したがって、ほとけさまの物
差しは、―存在価値―にもとづく
物差しだと言えます。

ひろみちや

「しあわせになる禅」(p.82)より

2008 DECADE

サリュ ―フランス語で教える意
2007-2008, 10th Anniversary



1950年大阪生まれ。41歳の時ウーマンズスクールで映像を学び以後ドキュメンタリーを制作。制作した作品は山形国際ドキュメンタリー映画祭やソウル女性映画祭などで上映される。1994年、ドーンセンターに勤務。ビデオ講座の講師などを努める。2003年カフェ放送でこれ開始、その後2006年には「映像発信てれれ」設立。

映像発信の場で 思いを伝えて

映像を「回し飲む」場づくり

映像制作との出会い

河内長野の滝畑村で生まれました。子どもの頃は山の中を走り回っている事が多かったですね。高校時代も、文化祭等で演劇の演出を担うなど活発な生徒でした。卒業後には友人を通じて維新派の方に出会い、プロデュース公演のお手伝いをしたり、他にも

市民が作った映像作品を、市民が集う場で上映する「カフェ放送」の活動に取り組んでこられた下之坊さん。このたび、「映像発信てれれ」は、「おおさかCBアワード2007」の大賞を受賞されました。上映と語りを通じたコミュニケーションに着目した背景から、今後の展望まで、伺いました。

映像発信てれれ 代表

下之坊 修子さん

善き人々は

遠くにいても輝く

善き人々は遠くにいても輝く、
雪を頂く高山のように。
善からぬ人々は近くにいても見えない
夜陰に放たれた矢のように。

「法句経」より

應典院寺町倶楽部の
ニューズレター
サリュ
Vol.55

Top Interview

映像発信の場で
思いを伝えて

1

特集…次の10年に向かって

再開2年目のコモンスズフェスタ、
そして10年目の應典院。

それぞれの創造性が、
目の前に現れる。

4

「JALIN KINOSHITA/2008」
参加企画大特集

5

2週間の空気を振り返って

9

「067/2007」
應典院再建10周年

10

「應典院プロジェクト」メンバー座談会

コンセプトブックから
10年を経て

12

應典院10年史(4)

おきと社会の新しい関係を紡ぐ。
應典院、社会と共振した10年。

16

築港ARCIイベントレポート

2006〜2007年の
振り返り

20

「ひと」と「場」の交差点
應典院につき

22

絵を描くなどして過ごしていました。

高校卒業後から映像に興味はあったものの、離婚前の友人の「主婦で収まっているのはもったいない」の一言がきっかけとなり、1991年にウーマンズスクールのビデオ講座で映像を習うことにしました。実は映画やテレビをあまり見ておらず、理解できないことも多かったのですが、講座後の飲み会が面白くて、毎回終電まで参加していましたね。女性の学校だったのもあって、飲み会では同じような不満がどんどん出ていきました。私も思いを語っていましたが、ふと「これを映像にしなければ」と思ったんです。修了後、女性による映像制作グループ「ビデオ工房 AKANE」を立ち上げました。また、この講座を前後して、「離婚を選んだ女たち」のシリーズを作成しました。

カフェで映像発信

まずは勉強会を開き、ヨーロッパに視察に行きました。帰国後、パリで出会ったカフェテレビのことが気になりました。作品を上映する段階になったとき、お

客さんがアクセスする「場」が無いと駄目だし、テレビ等で放送するよりハードルも低い。ただ、カフェ放送の事例がない日本では理解を得るのが難しかったです。神戸と京都は全滅でしたが、大阪では「なんか面白そうやからやってみよか」という声をいただき、2003年に6件のカフェから上映を始めました。テレビや新聞等の報道もあって、3ヶ月間の試験上映の間には13件まで伸びましたが、いざ契約となると急に減りましたね。年末には3件にまで落ち込みましたが、2006年初めころから再び盛り上がりました。長居にある町家を画廊にした「キットハウス」の野崎さんの協力が得られたためです。

野崎さんは、「放送と女性ネットワークin関西」の方で、テレビ局を退社された後に「これからは自分が住んでいる地域で面白い事をしていき



「喫茶どるめん」での上映の様子

たい」と考えておられました。そこで、まず画廊で

の上映を始めました。これがきっかけとなり、大学や市民活動センターなど、喫茶店、飲み屋、バーだけでなく、人が集まる場所で映像を通じて思いを伝えられる場所は他にないかと探すようになりました。同時に、上映だけでなく、映像制作について教えたり、機材の貸し出しをしたりしていたら、その方からのつながりで色々な場所で上映出来るようになりました。

制作・上映・語りで生まれるつながり

作品を作って内輪だけで見ると、人に見せていくのでは面白みが全然違います。映像の中に記録された人や環境のことを、直接本人が言わないと分からない事も多々あります。それらを伝える事によって、映像制作した発信側だけでなく、その周りも何かに気づき、変わります。そのため、技術や発想も豊かにしていこうという思いが持てます。より多くの人が思いを伝えていけば、どんどん面白い世の

中になっていくでしょう。

ちなみに「てれれ」というのは、パラグアイの言葉でマテ茶を回し飲みをする習慣の事なんです。「映画を観に行こう」では無く、お茶を飲みながら、食べながら、おしゃべりしながら、楽しく映像をみる。ですので「てれれ」は、映像作品と上映する場所と見に来た人、全体でひとつの意味があります。

「カフェ放送てれれ」の活動は、2006年に「映像発信てれれ」という組織へと発展しました。今後は、作品をつくっている人たちとひとつつながりたいですね。日本全国でてれれをやって欲しいのもありますし、大阪は面白いから大阪にこだわってやって行きたいとも思いますけど、日々揺れ動いています。やっぱり、大阪を中心に全国で、とも思いますが、上映する場所に対するこだわりはありません。むしろ作り手のこだわりが一番ですね。それも、上手に作るというより心に響くものの方が大切です。他地域に広がり、作品のテーマや表現方法がより立体的になればいいと思います。

COMONS
FESTA
2007-2008

コモンズフェスタ 2007-2008 参加企画大全集

例年秋に開催してきた「コモンズフェスタ」を、2007年度は1月に開催時期を移して実施いたしました。これは2006年度、10月まると1ヵ月を会期に充てたところ、比較的「秋はイベント繁忙期で、なかなか行けない」という声をいただいたためです。そこで、大胆にもイベント閑散期である1月に移動してみました。そんな新生コモンズフェスタにて、どのような企画が展開されたのか、一挙にご紹介します。

【事業形態】 今回のコモンズフェスタの参加事業は2つの枠組みからなります。

- ① 特別事業…大阪市・財団法人大阪市協会による現代芸術創造事業
- ② 参加事業…應典院寺町倶楽部共催による参加団体の主催事業

1/
11-25

15days

ハヤシエリ展 HAPPY5

【エキシビション】



参加事業

赤ちゃんとしてこの世に生を成し、最初にする動作は「触れる」こと。触って、そのモノから伝わる暖かさや冷たさを吸収するのです。私の作品はそんな原始的な動作から生まれる、ちぎり絵です。みんながHAPPYになれる作品づくりが私のテーマです。人生のスタートとゴールが密接なお寺という空間での展示。2階の窓からは、昔を生きた人間たちが、悲喜交々な思い出とともに眠っている。人生をHAPPYに過ぎて欲しいと願う作品たちが、ほんの一時でも幸福であった時の記憶となっていれば幸いです。

[ハヤシエリ]

1/
11

Fri

出張講義 アートマネジメントの理論と実践

【レクチャー】



参加事業

2006年から学術交流協定を締結している同志社大学大学院総合政策科学研究科との連携による出張講義が展開されました。テーマは舞台芸術についてでした。講師を務めたのは、2週間後に公演を控えた「劇創ト社」主宰の城田邦生さん。特に、ドイツのオペラハウスが、芸術監督を頂点とした、役者・舞台制作・事務局の一体的な運営がなされている「クローズ」なシステムに対し、とりわけ関西の演劇界が人的に「オープン」であることが強調されました。終了後は稽古風景も見学させていただきました。

[事務局]



企画調整中の事務所内のホワイトボード

もはや30年前の書物ですが、清水博の「生命を捉え直す」(中公新書、1978年)の中に「フィード・フォワード」、ということばが登場します。これは現在から過去に振り返る「フィード・バック」の反対の概念で、「このすぐ先の未来の状況の現在への回帰」を意味することばです。「過去、現在そしてすぐ先の未来にかけてのドラマの筋(ストーリー)がまったく見当がつかなければ、現在何をなすべきかもわからない。」だからこそ、混沌とした状態のときほど、この「フィード・フォワード」が必要とされ、未来のあるべき姿に思いを巡らし、そのあるべき姿を実現させていく具体的な取り組みが必要となる、と述べられています。

再開2年目のコモンズフェスタは、この「フィード・フォワード」に共感しつつ、その概念を示した著者の別の作品「場と共創」のことばを借りて、「協創のかたち」をテーマに掲げました。催しにて体现される各々の創造性に着目し、協働することの意味を実感し合うことを目的にしました。今回は特集として取り組みをまとめます。

折しも、應典院は再建10年という節目を迎えました。今回はその節目の意味についても、関連事業の報告と重ねて探ります。

■ 次の10年に向かって ■

それぞれの創造性が、
目の前に現れる。

再開2年目のコモンズフェスタ、そして10年目の應典院。

- p.5-8……2007/2008 参加企画大全集
- p.8………ブレ企画・クロージング企画紹介
- p.9………コモンズフェスタ 2007/2008 を振り返って
- p.10-11……應典院 10周年記念事業報告
- p.12-15……應典院プロジェクトメンバー座談会
＜コンセプトブックから10年を経て＞

1/
19

Sat

ARC トークコンビレーション出張 ver. —アートの現場もからめて?—

"コミュニケーション"について年始早々考えてみる会

主に看護や福祉に関わる仕事をされている西川勝さん(大阪大学 CSCD 特任准教授)と清水邦子さん(光愛病院院内喫茶「うたたねや」店主)のゲストを取り囲んで、参加者同士が自由に発言しあえる柔軟なトークサロン企画でした。日常の中で数多く出会う「わからない他者」に対して、我々はどう接していけばよいのか。「すぐにわかりあえると思わないで、わかりあえないという前提のもと、真摯に向き合っていくプロセスこそが重要」という西川さんの示唆に、はっと気づかされた人も少なくなかったのではないのでしょうか。

[事務局]

[トーク]



参加事業

1/
19-20

Fri

ちぎって描こう ワークショップ

今回のワークショップでは、小さな子ともから、カップルや仕事仲間の方まで、様々な方が参加してくださいました。誰にでも作品を生み出すことができる。小難しくアートを捉えたり、ブランド化する風潮もありますが、私はアートを日常の一部として捉えて欲しいと常々考えています。作品から受ける印象と、実際に自らの手でちぎり、レイアウトを考え貼るのは全く違うことが判ります。そうして作業をした後と、前とは作品の見え方が違ってきます。家に帰ってからも熱心に作品作りをしているという声を聞くと、ほんとうに嬉しくなります。[ハヤシエリ]

[ワークショップ]



参加事業

1/
20

Sun

映画のおしゃべり会新春スペシャル

毎月第3日曜日、研修室Bにて「映画のおしゃべり会」が開催されています。今回、その特別編として、会場を本堂ホールに移し、210インチのスクリーンで上映を行い、世話人の磯野さんの軽妙な進行のものと、秋田住職も含め、その作品にまつわるトークを行いました。今村昌平監督の『にっぽん昆虫記』の他、テオ・アングロブロス監督の『霧の中の風景』を主に取り上げました。1988年の第45回ヴェネチア映画祭にて、監督賞、銀獅子賞を受賞した作品です。映像詩というのがふさわしい位、描写が美しいギリシャ映画でした。

[事務局]

[映画とトーク]



参加事業

1/
12-13

Fri

てれれ上映@コモンズフェスタ

本誌の巻頭にもあるインタビューにも登場いただいた、下之坊さんが主宰する「映像発信てれれ」による上映会とトークが、2日間にわたって開催されました。5年間かけて上映されてきた約350本の中から、障がい者、国際、2007年の人気作品集、身近なアート、女性・ジェンダー、パブリックアクセスと、6つの「番組」が編成されました。なんと、上映作品の作家さんも全員登場という趣向が凝らされていました。各回とも盛況で、上映後に行われたトークでは、鑑賞者の皆さんと作家さんが軽妙なやりとりを重ねていました。

[事務局]

[映像上映とトーク]



参加事業

1/
15,18,22,25

4days

出張講義 超基本!! 本若流殺陣塾

最も気を遣ったのは、当たり前ですが、怪我をしない、させないことでした。次に姿勢。まっすぐ背筋を伸ばし、腰を落とし、下腹に力を入れる。スポーツや格闘技の基本と全く同じで、足腰が重要です。基礎となる21手を中心でしたが、集中力を持続させる事が困難でした。集中力が切れると姿勢も崩れます。何より、戦いの中では斬られてしまいます。軽く息を抜く短かな休憩をこまめに取りました。役者の参加者には今後も続けて欲しいです。一般の参加者には時代劇などを見るときに斬られ役の方にも注目する等、体験したからこそ分かる視点で時代劇を見るとまた違った面白さが味わえます。[平宅 亮]

[ワークショップ]



参加事業

1/
19-25

7days

太田浩司展 マイ・プライベート・サニー

東京に行っていたのでその場で写真を取りました。トイカメラですのでどう映っているのか楽しみでした。公園、空、町並みの風景を思いつきでとりました。展示には、ただ壁に飾るというのは少し面白みに欠けると思い、平面から空間へと考え作品を吊りました。いつもは、小さなカフェで作品展をしたりしています。役者もしていますので、これからは両立してやって行こうと思います。

[太田 浩司]

[エキシビション]



参加事業

2 週間の空気を振り返って

事務所内のホワイトボード一面に、企画が書き出され、担当を決めて行き、それぞれの企画をどう進めて行くのかを話し合う。こうしてCOMONSフェスタ 2007/2008 はつくられていきました。1998 年から 2003 年までは、実行委員会形式で企画運営がなされてきましたが、今年度も昨年度と同じく、スタッフが企画を立案、招聘、調整するという形を採ったためです。

最も大きな特長は 2 週間の会期全日にわたり、ハヤシエリ氏のちぎり絵の展示「happy × 5」では、可愛いちぎり絵たちが気づきの広場のガラス面を埋め尽くしたことでした。そして、ちぎり絵ワークショップでは和やかな音楽の中、慎重かつ大胆にいろんな種類の紙を使い、作品が作られていきました。

また、今回は趣向の異なった 2 つの映像上映がありました。「映像発信てれれ上映会」ではジャンルを 6 つに分けて上映され、上映後には、「言いたい事を言う」というコンセプトのもと、上映後には作品の経緯や工夫が制作者から、また、見に来た方々からは質問や感想が投げかけられ、大いに盛り上がりました。もうひとつの上映会「映画おしゃべり会新春スペシャル」では、いつものおしゃべり会とは趣向を変えての上映付きだったため、作品の奥深くまで追求したトークが本堂ホールにて繰り広げられました。

なお、ちぎり絵作品に囲まれた気づきの広場では、多彩な企画が展開されました。会期中盤では「築港 ARC」の通常事業「アークトークコンピレーション」の「COMONSフェスタ特別版」が開催されました。今回はコミュニケーションをテーマにして展示作品との一体感を味わいつつ、話が盛り上がりしました。

加えて、身体を使ったワークショップ「超基本!! 本若流殺陣塾」では、役者達と一緒に一般参加者も体を動かして、基礎の動きから本格的なものまで殺陣を楽しみました。役者が織りなすアート展示として 1F ウォールギャラリーでは「マイ・プライベート・サニー」を開催。トイカメラで撮影された街や公園の風景が平面から立体へと展示方法に変化をつけ、約 100 点の展示がされた。「見て楽しむ」ではなく「楽しみながら見る」という、空間そのものが作品となっている印象でした。

さらに、本堂では劇団としての最終公演となる劇創ト社が LOW POWES と組んだ演劇が 3 日間にかけて公演されました。平日にも関わらず、多くの方々が観劇に来られ、決して文化や芸術は週末にのみあるべきものではないことを再確認しました。

このように、多彩な企画が展開されましたが、應典院寺町倶楽部の通常事業である「寺子屋トーク」や「コミュニティ・シネマ・シリーズ」が開催されなかったこと、また、広報計画が不十分だったこと、会期変更による成果の分析など、今後の課題も認識しています。しかし、2 週間をかけて、應典院には、ある種の「空気」が作られたことを、スタッフ一同共通の体験として抱いています。まさに今回のテーマとした「協創のかたち」は、トーク、ワークショップ、演劇、アートの企画に浸ることで、からだ全体で感じた、目には見えない雰囲気であった、ということです。應典院はこうして出来上がった空気の中で呼吸を続けるお寺なのでしょう。

【事務局】

1/23-25

3days

劇創ト社 LOW POWERS

ラジオスターの悲劇 ~ 3rd session ~

COMONSフェスタ 2006 にも参加した関西小演劇界の作家・役者によるコントユニット「LOW POWERS」が、今回の公演で劇団として幕を閉じる「劇創ト社」とコラボレーションした公演でした。3 人の作家が脚本を分担し、コントを交えた 3 本のオムニバス作品。平日のみの公演でしたが、「最終公演」という意味も重なって、連日大盛況でした。日替わりゲストがどんな風に作品を豊かにするのかを見てみたいと、複数回鑑賞した方もいらっしゃいました。作品の解説と、文字通りの「舞台裏」は劇創ト社のブログでお楽しみくださいませ。 [事務局]



【演劇】

特別事業

以上 9 つの企画に加え、会期前日にはプレ企画、また終了日にはクロージングトークを行いました。以下、ご紹介します。

プレ企画

【レクチャー】

1/10
Thu

若い演劇人のための基礎講座『冬の特別講演』



2007 年 6 月より、應典院で開催されている、劇作家・演出家平田オリザ氏による 12 回連続講座の特別編として、一般にも公開した講演が実施されました。作品ごとに俳優を集める形式で上演する「遊園地再生事業団」主宰の宮沢章夫さんをゲストにお招きし、プレビュー公演から本公演へとつなげていく「ワークインプログレス」形式等について学びました。

クロージング企画

【トーク】

1/25
Thu

COMONSフェスタ 2007/2008 クロージングトーク



ハヤシさんの作品に囲まれる中、「劇創ト社」(としての)城田さん、殺陣のワークショップの企画をいただいた「本若」の平宅さん、1 階ウォールギャラリーにて写真とスケッチを展示いただいた「未来探偵社」の太田さん、そして LOW POWERS のチャーハン・ラモーンさんによるトークが行われました。遅い時間にもかかわらず、20 名程度の方々に残りいただき、充実した議論を行うことができました。

11月10日(土) 應典院再建10周年記念 フォーラム開催

1997年に再建された應典院の10年を回顧し、次の10年を展望するフォーラムを実施いたしました。なお、本式典は完全招待制にて開催させていただきました。なお、当日刊行した10周年記念誌は一般の方にも頒布されています。ご希望の方は應典院・應典院寺町倶楽部まで。ウェブサイトからもご注文いただけます。



それぞれの時代に縁のゲストが登場



最後は秋田光彦應典院代表の5本締め



記念誌は85版136ページの大作です



本堂ホールに並ぶ「遺影」と記事に圧巻



連日のトークにも多数の参加者が

10月10日(水)～10月14日(日) 「遺影、撮ります」～野寺タ子 写真展

本堂ホールにて、朝日新聞夕刊に76回連載された、写真家・野寺タ子さんによる写真集出版を記念した写真展が開催されました。会期中は13時より、日替わりでゲストを招いたトークイベントが「気づきの広場」にて行われました。



生命体をテーマにした展示



トークの進行は山本麻友美さん

10月26日(金)～11月25日(日) 「境界ープラトニックディスコ」 ～船井美佐作品展

大阪府立現代美術センターとの協力で、1階のギャラリーと2階「気づきのひろば」に造形作家の船井美佐さんがインスタレーションを設置しました。また、23日にはカッティングシートで彩られる中、2階にてトークイベントを実施しました。



「転校生」という題材で班ごとに制作



校長先生をはじめ学校をあげて協力

11月21日(水)

「演劇で学ぶ!ワークショップ 授業」

大阪市教育委員会の協力を通じて、生魂小学校の小学6年生を対象に、「わたし」とは何かを再発見することを目的した授業開催にあたり企画調整を行いました。講師は劇作家・演出家の平田オリザさん。3時間目の発表会には保護者も観劇されました。

9月24日(月・祝)

寺子屋トーク第50回

「市民の時代のスピリチュアリティ」

島藺進さん(東京大学教授)をメインゲストに、大阪大学・同志社大学との共催により、「公共宗教」の観点から、10年間・50回にわたって提供してきた市民との対話や交流の場の総括を行いました。



2部のゲストは関嘉寛さん(大阪大学)



恒例のワンコイン交流会も開催

11月8日(月・祝)

コミュニティ・シネマ・シリーズVol.11

「終りよければすべてよし上映+トーク:あなたの家にかえろう」 「高齢社会をよくする女性の会・大阪」との協力で、羽田澄子監督最新作「終りよければすべてよし」の上映と、桜井隆医師(さくらいクリニック院長・尼崎市)による終末期医療の講演会を実施しました。



実行委員会形式の企画運営で会場は満員



交流会ではゲストの桜井さんがピアノを演奏

11月23日(金・祝)

寺子屋トーク第51回

「アートが変えるくまち」の風景」

翌日から應典院で開催の学術会議「日本アートマネジメント学会」のプレ企画として、北川フラム氏の記念講演と、上田假奈代氏らによる、まちとアートを焦点を当てたシンポジウムを開催しました。



新潟や徳島の他大阪でも活躍する北川さん



徳島県上勝町から花岡史絵さんも事例報告



應典院再建10周年

2007年度、「開かれたお寺」應典院は再建10年、應典院寺町倶楽部は設立10年の区切りを迎えました。この10年は、市民の学び、癒し、楽しみの場所としてお寺が活かされるよう、21世紀のお寺のモデルを創造する挑戦の連続でした。

教育、福祉、芸術が公共サービスとして提供されることが当然となった現代において、少なくとも近世まではお寺が地域生活の基盤施設として役割を果たしてきたという原点に回帰するために、多くの協力者を得て活動して参りました。そこで今秋、9月24日(月・祝)の「寺子屋トーク第50回記念プログラム」を皮切りに、再建10周年記念事業を各種開催してきました。これらは10年の総決算であると同時に、次の10年を展望する機会となりました。ここに、お礼の意を込めつつ、それぞれの事業を報告いたします。

〈コンセプトブックから10年を経て〉

應典院再建ならびに應典院寺町倶楽部設立にあたっては、「TEAM PRESENCE」という名前で、理念や内容「應典院コンセプトブック」としてまとめた方がいます。今回、そのメンバーにお集まりいただき、この10年を総括する座談会を行いました。

— それぞれの、きっかけ。

西島▽このメンバーの中ではもともと應典院に長く関わってきています。と言うのも、應典院プロジェクトに関わる以前から、秋田住職がされてきた現代教化イベントの舞台監督で関わっていたためです。現代教化とは、文字通り、今の時代に合った仏道の普及のことです。京都の佛教大学やパドマ幼稚園の体育館で行っていた、音楽関係の催し、また講演会の運営に、友人の一人として手伝っていました。そのため、廃墟になっていた應典院を見ていました。そして、多くの人がが駐車場にしては、という意見のなか、まず再建する際の建築家は誰かを考える場で意見を言ったことから、後々、そし

て今までずっと関わるようになりました。

栗本▽私はまず秋田住職と「なにわの語り部養成講座」で出会いました。その運営を西島さんに支援いただいていた。再建のプロジェクトに関わるようになったのは、秋田住職から声をかけていただき、一心寺シアターのイベントで進行役を任されることがきっかけでしょう。今思えば、そうした機会こそ、秋田住職による再建のコンセプトワークの一環だったのかもしれない。

吉崎▽私だけが周辺におらず、第三者の紹介を通じてプロジェクトに入りました。

— コンセプト策定当時の時代背景

吉崎▽当時、震災、オウムという2つの

出席者

栗本 智代さん
西島 宏さん
吉崎 中さん

聞き手

山口洋典（應典院寺町倶楽部）

2008.2.19@ 大阪ガス CEL



大きな物語によって、宗教は危険が必要だということがメンバーで共有されていました。ですので、コンセプトワークづくりはエキサイティングでした。特に宗教法人である應典院と、NPOである寺町倶楽部との二重構造がどう定着できるか、それが疑問であり課題だと捉えていました。ボランティアありきでは、事業の推進体制を確立していくことも難しいので、いかにしてスタッフの手当を工面するか、大蓮寺や應典院との関係をどう取っていくのか、特に秋田住職がどんな立場で事業に関わるか、ということを中心に議論をしていました。

西島▽寺町倶楽部がお寺の身代わりとなつて事業を担うことで、ご縁がなかった

方を会員としてどう増やすか、特に議論しましたね。単に再建されたお寺の応援団ではなく、事業の担い手として組織が機能していくことを理念に掲げていましたから。

栗本▽一般にはお寺は閉じられていくことが多い。既に、お寺が劇場を持つことについては一心寺という先例がありましたが、應典院が劇場運営に本格的に取り組んでいくという方向を示し、いざハコが出来たとき、あまりに美しく、余計に入りにくさがあるのではないかと、という印象を抱いたのをよく覚えています。ですので、無宗教の方も、ニュートラルな人も気軽に入っていい、というメッセージを寺町倶楽部というかたちを取ってやるべきなのか考えました。

初期期の應典院

栗本▽1年目の課題は、場所への先行投資をいただいた應典院を動かす原動力を持つ人々が集まって何をしていくとしているのか、コンセプトをPRし共感を得ることでした。その後、寺町倶楽部の

活動が進み、3年目からアートの要素が強くなり、少し宗教色が薄まっていったように思えます。そうして、お寺としての應典院の間口が広まってきたという感じですね。

吉崎▽最初、シアトリカル應典院に集まってくるのは、若い人だろうと思っていました。しかし実際は自律する生活を送る人、時間に余裕がある人、また場所や催しの中身に関心がある人は入って来やすかったのでしょうか、若者はなかなか入ってこなかったですね。ただ、若い人で、自分探しをしている人が会員になって、スピリチュアルなものを求めてきたことにはびっくりしました。

西島▽私自身は、OMS、プラネットステーション、その次に應典院に携わってきました。そういう意味で、現代演劇スポットをつくるのがライフワークの一つです。ただ應典院では、それまでのスポットとは異なって、劇場が観客を持っている劇場をつくれなのか、と考えるきました。

栗本▽きつと、「場」の持っている空気が

澄みすぎているんじゃないかな。例えば自分感謝祭のように、普通の人がお寺に行くことが楽しめるというのかもしれない。演劇であつても、お墓参りと一緒に、お寺に行くことは気持ちがいいものだ、と思ってもらえればうれしいです。

— コンセプトブック以降の関わり

吉崎▽私は仕事をやる上で、卒業することの意味があると考えています。むしろ應典院は実際の場所があるわけですから、その存在の認識と価値を上げていくことが理想だと考え、自分自身は当初より確信的に運営から引いていこうと考えていました。ですので既に初年度以降は主体的に携っていません。

栗本▽私の場合は、出産、子育て期に入つたので時間的に関わることが難しくなつたためです。應典院は放っておいても動いていきますが、家族のことはそうもいきません。ただ、真摯にいのちの問題を取り上げていくということは、宗教を超えて重要なことだと感じています。

西島▽実は私は寺町倶楽部の初代事務局長でした。しかし寺町倶楽部の事業に秋田住職が前に出て、会員はその応援団という位置づけがなされていく上では、その体制には反対の立場を主張していた以上、関わることはできないと思って、組織の役職から離れた。ですが、演劇の空間としての應典院をどう成功させるか？プロモーションを仕掛けるにはどうしたらいいか？舞台芸術祭をどう成功させるか？気づけば、そうした各種の事業の運営には携わってきています。

——当初からみた「想定外」

吉崎▽コンセプトブックに書いていて実現しなかったこともいくつかあります。実は「ニュー葬式」などは「収益エンジン」として、お寺ならではの事業だと思っていたのですが…。

西島▽葬式はしないということになったから着手できなかった。

吉崎▽そう。なので、コンセプトブックには、「気づき・学び・遊び」と「セレモニー」の4つの点からできる正四面体で

事業の全体像を表現していたんですが、結果として寺町で、上町台地で事業が転がっていった、まさに角が取れた感じですね。この4つの点が後に、学び、癒し、楽しみという3つのキーワードによるトパス、つまり應典院の定義になっていったんでしょう。

栗本▽コンセプトブックを立ち上げる時期と今では、人材の層に格段の差がありますね。当初、ボランティアという志はあっても技術がない人が多かったと思います。應典院を通じて成長した人も多いのではないのでしょうか。地域の人材、NPOをはじめとする団体の成長が、應典院の成長と併行して上昇線を描いており、良い感じでリンクしている。

——プロジェクトメンバーによる評価

西島▽昨今應典院には多方面から注目が集まっていますが、正直、應典院のどこを評価されているのかわかりません。若者の集まるお寺という評価は、現代演劇の会場として貸しているから3万人が集まっているわけです。ですから、3万と

いう数字で評価される部分と、一方で多彩な趣旨の活動がなされているお寺という評価とは別の観点であることを踏まえておかないといけないですよ。こんな風に、たまにはサリュに辛口なことも必要では？

栗本▽そうですね。特にメディアの人たちは、取材する側が気に入ったところ、都合のいいところを取り上げます。そのため、表面をなぞっただけのものから、学識者の専門から語ったもの、宗教家が変わることを始めたとするもの、などなりがちです。ただし余程の人でないとい総じての評価はできないでしょう。まずは自己評価が必要ですね。事務局側が、運営側が、重点を置いて、新しい価値を求め、それまでの應典院を「ずらし」ていかなければ、日々の反応に対応して終わってしまいます。それでも、上手く流れに乗って、軌道に乗ることで、世間からの合格点は取れるでしょうが、この3年は何をしていくのか、人の流れ、テーマを置く必要があると考えます。

西島▽そうやってきたのも、スタッフワ

ークが充実したことが大きいでしょう。当初は綾田さんが1人いるだけでした。その後柳澤くんが演劇専門で入り、事業を受ける方の体力が追いついてきたように思います。

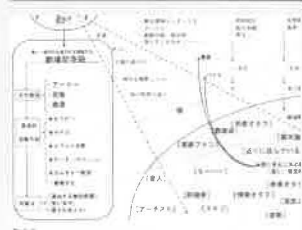
栗本▽もう一つ、プロジェクト検討当時とは異なつて、まさに企画力を持った人が増えました。それらの人々が集まり、場を貸すだけで、應典院が何かをやっているように思われるところもあります。もちろん、それもあっていいでしょう。しかし、寺町倶楽部、また應典院が本当にしたいことは何かは考え続けていくって欲しいです。應典院の本寺である大蓮寺が運営するパドマ幼稚園と連携してできる幼児のことなど、次の10年で新たに展開して欲しいですね。

——次の10年を展望して

栗本▽次の10年を見つめる上で、この10年のあいだ應典院に関わっていない人は誰かと考えると、育児中の主婦層ではないでしょうか？そうした子育てに追われてきた方々は、今、親が年を取ってき

て、いのちのことを考える始める時期です。ですので、幼児から高齢者とのあいだの層にも関心を向けていくことは、魅力的な発信、挑戦、開拓すべき研究テーマだと考えます。例えば、こどもを連れて関わる、できることに取り組んでいってはいかがでしょうか？

吉崎▽気づき・学び・遊び・セレモニーという当初のコンセプトから、学び・癒し・楽しみという應典院のトパスが出来上がった10年でした。次の10年は、もっとやりたい、という思いを出していくということが重要ですね。年に1回でもこういうことをやる、というのが発信力になっていきます。また、寺町倶楽部は卒業することに意義があるということが明確になるといいですね。学校に入学して、壁にぶつかって、悩む、そんな場所に行くことだと捉えて参加していくという具合です。学校もいろいろありますが、高校くらいの比喩がいいかもしれませんね。應典院で関心を持ったことを仕事に活かしてもいいですし、さらに専門性が高い活動団体に関わっていいと思います。



座談会では過去の資料を懐かしみながら議論がなされました。

中でも、吉崎さんが持ってこられた右図の「應典院プロジェクトフレームワークメモランダム」には、一同声が上がりました。

お寺と社会の新しい関係を紡ぐ。 應典院、社会と共振した十年。

上町台地からまちを考える会

應典院ならびに應典院寺町倶楽部の活動がひとつの点から面へと広がる過程のなか、上町台地という舞台が浮かび上がってきた。上町台地とは、大阪の都心を擁する洪積台地だが、高度な生活機能の集積区であると同時に有数の歴史文化ゾーンの顔を持つ。よって、単に居住のアメニティと言ったような文脈を越えて、大阪に遺された最後の「聖地」とも言える魅力を潜在していた。しかし、ポストバブルの波に乗って2000年に入った頃から都心開発ブームが起り、無節操なほどの高層マン

ションが乱立してきて、「聖地」はまさに消費の波に吞まれていった。新しいまちづくりの必要性が求められていたのである。秋田は01年より住宅都市整備公団（当時）による「上本町コミュニティネットワーク構想研究会」への参加を通じて、都心居住の魅力を高める参加型のまちづくりを実現するためのプロジェクトに関わっていたが、役所仕事の限界を痛感し、方向を転換。当時研究会の理論的支柱でもあった高田光雄（京都大学、渥美公秀（大阪大学、弘本由香里（大阪ガス）らと共に、新たに上町台地まちづくりNPOの立ち上げを発起した。その際、秋田が参加を呼びかけたまちづくりの担い手たちが、空

堀界限の六波羅雅一、コリアタウンの宋悟、上町台地界限全般を活動の対象としていた小田切聡、五条学区で地域密着の取り組みを進める富士原純一らである。そうして、市民と大学と企業と地域が連携した新たなまちづくりプラットフォーム「上町台地からまちを考える会」は、03年5月に生國魂神社の参集殿で盛大に発会式を行い、産声を上げることになる。以来、應典院の活動は、上町台地における活動と同心円状に位置づけられていくことになる。活動のテーマも、商店街活性化あるいは観光資源の再開発といった従来のまち起こしの観点を超えて、芸術や哲学、宗教といった人文科学的アプローチもあつて、きわめてユニークな取り組みであった。また、04年には、應典院がホスト役となり、上町台地からまちを考える会が「てらまち極楽ストーリー」を主催。以後、コリアタウン、空堀界限と、地域内の拠点をリレーし、上町台地の資源を巡る物語を発信してきた。考える会の初代事務局長は早川厚志であったが、このとき既に、後に應典院2代目主幹に就任する山口洋典が、上町台地界限でのフィールドワークを重ねつつ、同会のオブザーバー（当時大阪大学博士課程在学）として組織的に参画をしていたのだが、この点は後述する。

さらに上町台地と應典院との接点は、多元的に広がる。

大阪府立現代美術センターの「大阪・アート・カレイドスコープ」への協力はその象徴である。具体的には、03年度より開催されている同展は、05年度より、アートNPOなど地域拠点と協働するスタイルで展開するようになり、開催協力者が公募され、その有力拠点として應典院がエントリーされる。すでに独自企画として現代アートとの関わりを深めてきた應典院は、若手作家の発掘・育成を図りつつ、お寺という場の可能性に對峙する先進的な美術家とのコラボレーションによって、その事業は文字通り多面的に展開されていくこととなった。

とりわけ、日本におけるランドアートの第一人者、大久保英治と取り組んだ「遊行のフォークロー」（05年）は、上町台地界限を連日10日間歩き通し、その道のりから立ち上がってくる様々な断章を作品に昇華させるといふ、コミュニティアートの意欲的な試みであった。歴史、身体、時間といった記号が、大勢の同業者を得て、作品以上の作品を創り上げていく。巨大な竹と石の作品が屹立する本堂の空間にて、大久保と秋田が交わした対談も、現代における宗教と芸術の邂逅が刻まれたといつてよいだろう。

新たな発信力

應典院が上町台地界限へと活動をシフトさせていった頃、

すでにその活動には全国的な注目を集めていく。NHK教育テレビの先進的番組として知られるE・T・V特集で、應典院が取り上げられたのも06年である。宗教学者・上田紀行がその可能性を尋ねて行脚する「お寺ルネサンスをめざして」が放送（06年1月16日）されたことは、應典院ひいては日本仏教に対する注目と関心を拓ける転機となった。

番組では、應典院のほかに、長野の神宮寺、新潟の妙光寺が取り上げられ、それぞれの住職と上田が対談する構成をとったが、いずれも独自のスタンスからその社会的役割を再生する意義を発信したものであった。ときを同じくして、1月25日には、東京・愛宕の青松寺の「仏教ルネサンス塾」に應典院の全貌を紹介する特別イベントが開催され、満場の聴講者を集めるなど、いよいよ應典院の行動は全国に響くものとなった。

また、この頃、特筆すべきものとして、應典院コミュニティシネマのスタートが挙げられる。コミュニティシネマ活動の特徴は単なる興行ではなく、映画文化を上映を通して開発・育成していくことを目的としており、上映後に対話を行うなど、作品と鑑賞者を接続する形態を取ることが特徴である。05年の「鏡心」（石井聰互監督作品）、「カーテンコール」（佐々部清監督作品・原案を秋田が担当）を経て、そして06年3月の「ザ・コーポレーション」（マーク・アッカー、ジェニファー・アボット

ンソーシアム京都のスタッフ時代、秋田と出会う。以来個人的つながりを重ね、前述の上町台地からまちを考える会の2代目事務局長としての活躍ぶりに着目し、秋田から應典院への参画が要請された。山口は阪神・淡路大震災のボランティア体験を原点とし、また大阪大学大学院の博士後期課程において上記の渥美公秀研究室に属して取り組んだ上町台地でのフィールドワークを通じて人間科学の学位を取得していた。文字通り、市民の時代の知的アーティストとして、秋田はその見識と行動力に注目をしていた。

06年5月、京都・洛北の法苑院にて、山口の得度式を執り行い、この年から、應典院は山口を新主幹に据え、さらに行動の幅を広げた。定期事業の象徴である寺子屋トークには、内田樹、今里滋、柴田久美子、町田宗鳳、島園進らが相次いで登場した。また、国際交流基金等を通じた海外からの視察、交流も続き、アメリカ、ドイツ、ブータン、ベルギー、バングラディシュなど、諸外国からの訪問が相次いだ。そして、2年間休会を余儀なくされたコモンズフェスタが06年、装いも新たに新主幹の企画により再開したのであった。

社会参加としての仏教へ

近年、「エンゲージド・ブディズム」という動きに注目が集まっている。仏教と社会の接点を世界的視野からとらえることは結構だが、しかし、それらの議論においては、上座部仏教や、あるいは戦時体

監督作品：カナダ）以降、本格的な活動が展開される。同作はアメリカ経済社会の企業倫理の崩壊に迫った、優れたドキュメンタリー映画であったが、上映後にはCSRを巡るダイアローグが行われ、満場の参加者から活発な議論が起った。その後、コミュニティ・シネマ・シリーズは、アフリカ映画「母たちの村」、「ダライラマの般若心経」などすぐれた作品の発掘・啓発にかかわり、應典院の新しいアートマネジメントの路線として、現在通算で12回（08年4月現在）を数えるに至っている。

なお、このころ、同時に展開された、大蓮寺（應典院本寺）の「大蓮寺・エンディングを考える市民の会」の活動も付記しておきたい。こちらは伝統的な葬式仏教の可能性を切り開いた事業であるが、人生の完成期を寺とNPOで支援するスタイルは應典院同様である。04年に、大蓮寺・應典院両会場で開催された「エンディング見本市」では、模擬葬儀、お墓ツアーの実施や世界の死装束展やシンポジウムなどが開催、2日間で500人の参加、4局のテレビ報道など大きな注目を集めた。

2代目主幹に山口洋典、就任

10周年を目前にして、應典院の活動はすでにピークを迎えていた。それに対応するスタッフの再編も検討される中、06年4月に山口洋典が2代目主幹として着任した。山口は財団法人大学コ

制下の日本仏教が語られがちで、今日の日本社会における仏教の社会参加について充分な議論は尽くされていない。その周辺においては、ビハラーへの関心、スピリチュアリティの興隆、あるいは公共宗教なる概念の深まりなど、現代仏教は大きな地殻変動の中にある。

97年の再建以来、應典院がたどってきた10年の歴史は、まさに、既存の組織型、制度型の寺院仏教から、市民参加、あるいは公益文化の担い手としての拠点寺院へと、その位相を変容させた軌跡でもあった。07年の11月10日、應典院は有縁の方々をお招きし「記念フォーラム」を行った。当日は100人を越える方々が参集して、これまでの足跡を確認すると共に、これからのエールを交換した。この集いの場は、これまでの取り組みを単なる一寺院のエポックに留めることのないようにしようという決意の場でもあり、都市における寺院あるいはコモンズの再生に向けて、多くの思いが重ね合わされた。

すでに山口主幹の体制は、着々と基盤固めに入り、06年12月からは、大阪市現代芸術創造事業として「築港ARC」が開設、同志社大学大学院と芸術協定も結ばれ、應典院の新たな地域拠点として活動が始まっている。また、秋田は、上町台地に加えて、在宅ホスピス支援事業に着手し、さらに08年度からは大蓮寺が直営するバドミントン幼稚園の園長補佐に就任することとなった。文字通り、應典院はハコものではなく、人と場と関係を編み上げながら、「社会参加型仏教」を手掛かりに、つぎの時代の航海図を描き出そうとしているのである。

2006年 2007年の 振り返り

朝田 亘

築港 ARC

チーフディレクター

平成 18 年 12 月のスタート以来、早 1 年 3 ヶ月の事業を終えた築港 ARC。関西のコアなアート情報を提供しつつ、日常の中にアートを潜ませる様々な企画を行ってきた。ここではチーフディレクターの朝田が、平成 19 年度の活動を中心に振り返り、さらなるパワーアップに向けた意気込みを語る。

●多分野を繋ぐ「メディア」としてのアート

築港 ARC の活動は一言では非常に伝えにくい。個別の企画は、『サリユ』のバックナンバーをご参照いただくと、まずこの一年の中で、築港 ARC 自身が「アート」をどのように捉えるべきかが見えてきたように思える。「アート情報を伝える」「アートを日常の中に潜ませる」等々、いくつかのテーマを抱えてプロジェクトを進めてきたが、このカギカッコ内の「を」の部分に、気になるところ。つまり「アート」が目的語になっている。しかし、本当に「アート」を「届ける」ことが私達の第一義の仕事なのだろうか。スタッフ間で「築港 ARC で仕事をしてきて、一番嬉しかったことはなに？」という会話をしたことがある。そこで出た答えは図らずとも一致し、その時、何か道筋のようなものが見えた気がした。

「イベントが終了したあとで、私達（スタッフ）の手を離れて、参加者が勝手に交流して、仲良く帰って帰っていくとき」が一番嬉しい。しかもその参加者同士が日常的にはなかなか巡り合わないようなタイプ（職種や嗜好性、世代、国籍等）であればあるほど、なお嬉しい。この場合、「アートを届けることができた」ということは、第一義ではなく、「アートがメディア（媒介）となつて、人々が分野を超えて繋がりあう」ことが重要なのであろう。その出合いの質がよければよいほど、その出会った人達同士は、きっといつか「私達が出会ったきっかけは築港 ARC のイベントで…」と言ってくれるはずで、そのときはアートの価値を、自然な形で受け入れてくれるのではないだろうか。そのような出合いの場をデザインしていく。そのこと自体が「アート」なのだ。

●「人」って重要

築港 ARC には、色々な人が訪れる。オープンスペースとはいえ、別にカフェやバーをやっているわけではないので、それほどひっきりなしに人が来るということはないのだが、それでも色々な人が会いにきてくれる。この「会いにきてくれる」ということが重要なのだと、リアルな場所を持つ意味についてあれこれ考える。1 年以上もやっていけば、「○△さんはいますか？」と名指しで予約電話のようなものが入ってきて、場所に来るといふよりもその人に会いにくる利用者の方が多くなってくる。「この人に聞けば、デザインのことがわかる」とか、「この人だと演劇のことならお任せ」だとか、もっと単純に「この人なら自分の活動話にも、丁寧に、ただ耳を傾けてくれる」とか。そういう個人の想いをカタチにするために話に来てくださる方が増えてきて、「結局、「人」が場所の価値を作り上げていくんだな」と思い返した。築港 ARC というプロジェクトチームは「まず組織があつて個人がある」という考え方を、少なくともチーフディレクターである私自身はあまりしたくないと考えている。「個人がもっとも活かされるための組織」でありたい。これは「アート」という既存の社会システムを根っこから捉えなおす価値に携わる者としての願いでもある。

●「わからなさ」を楽しめたらいい

アートは難しい。確かにそうかもしれない。以前なら、アートを未だ見ぬ人たちに「アートは考えるものではなく感じるものだ」なんて常套句を使っていた節もないわけではないが、はつきり言うてやっぱアートは難しくってわかりにくいものだと思う。でも面白い。というより、だからこそ面白いと思う。「A をすれば必ず B になる」とか「C は D よりも美しい」といったように、あらかじめなんとなくでも「答え」が用意されている世界と違って、アートには「答え」がない。「わからな Or わかったように思い込む」とこと「わからないからこそ、とにかく思考し続ける」こと、果たしてどちらが真にクリエイティブなことなのだろうか？ 後者を日常の中に潜ませること、そのことが長いスパンで考えたときに重要だと考えている。このプロジェクトが終了を迎えたときに、アートの本質なるものに少しでも近づけていければ幸いだ。



子ども対象の「漣ぎ出す表現ワークショップ」は喜連小学校への出張企画にまで発展。さて、これは一体何をしているのでしょうか？



築港 ARC 各スタッフの専門性を活かしつつ、参加者皆で大阪のアート情報を編集していく「大阪のアートを知り尽くすの会」の様子。



会場を應典院に移しての「ARC トークコンピレーション」。ヘルパーや歯科医師、ウェブデザイナーからアーティストまで、様々なお客さんが参加。



「ARC トークコンピレーション」では多分野のゲストを招待。写真の会では発明家の六車義方氏とアーティストの梅田哲也氏の対談。



「ひと」と「場」の交差点……

應典院につき

呼吸するお寺・應典院の、11月～1月の活動記録です。
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

11月

- 3日・築港ARCコーディネーターの音楽ライブ！@築港温泉。「映像温泉 in 築港」銭湯で髪を乾かすその合間、心身ほぐしてビデオ鑑賞。11日まで。
- 4日・大阪アーツアボリア主催の「淀川テクニク」さんたちのワークショップに主幹、築港ARCスタッフが参加。
- 6日・秋田住職主催のお仕事研究会にスタッフ揃って参加。漢字表記など日本語の基礎を勉強する。夜は内蒙古で沙漠緑化に取り組むエコスタイル
- 8日・本堂のパンチカーペットを総入れ替え。10周年記念フォーラムのリハーサルを翌日に控えて、会場も心機一転。
- 10日・應典院10周年記念フォーラム、祝賀会。記念誌も完成！
- 11日・恒例の予ども七五三法要。終了後住職と主幹は「上町文化機構」シンポジウムで結へ。
- 13日・夜にバドマ幼稚園で應典院プロジェクトのスーパーバイザーを勤めた、大阪市長候補の橋爪紳也さんの個人演説会。

- 14日・橋爪紳也さんが中央公会堂で演説会。住職が応援演説で約900人に向かい熱弁をふるう。
- 17日・シチズンシップ共育企画による「生と死を考えるワークショップ」開催。住職、主幹が出席。
- 18日・日本アートマネジメント学会開催直前運営委員会。
- 20日・アート・文化情報番組「コネクタテレビ」の公開企画会議第1弾。
- 21日・平田オリザさんの演劇ワークショップが生魂小学校にて開催。若手演劇人のための基礎講座の皆さんと大阪市教育局委員会とのあいだを應典院がコーディネート。
- 23日・アートマネジメント学会「百年の絶唱」上映。監督も来訪。京都のシネマエンカウンタースペースの企画。
- 24日・日本アートマネジメント学会全国大会。午前中は分科会、午後から新川達郎先生の基調講演とシンポジウム「パトナーシップ解体新書」。
- 25日・日本アートマネジメント学会関連企画で上町台地のエクスカーションを実施。マイルドHOPENゾーン協議会の助成を得て。主幹と城田主務が上町台地を自転車で行く。
- 26日・ダンマパダを読む第6回。
- 27日・月例会。今月の振り返りと次月の誓願の法要と法話。

12月

- 1日・築港ARC大阪のアートを知り尽くすの会第3弾。主幹は大阪YMCA125周年記念のフォーラムで講演。
- 3日・水都大阪2009の第5回アート部会。主幹が参加。
- 4日・10周年記念事業総括会議。
- 8日・アルバック40周年記念「アルバック・タグボート・フォーラム」に住職が出講。
- 12日・築港ARC開室祝1周年！
- 15日・15日・築港ARC月例トークサロン！第10弾。淡路島でのアートNPOフォーラムに主幹が出講。7時間のラウンドテーブルの進行役。
- 17日・ダンマパダを読む第7回。第一期終了。韓国料理で懇親会。
- 18日・研修室Bでヨガワークショップ。20日まで。午前中は研修で10周年記念誌を精読。
- 20日・築港ARCスタッフ忘年会
- 25日・「コネクタテレビ」公開企画会議第2弾。主幹と主務はマイルドHOPENゾーン事業のヒアリング。
- 26日・恒例の自分感謝祭。一年をふりかえる。なにわと、築港ARCスタッフオープンミーティング第7弾。
- 27日・大忘年会。日頃お世話になっている方々、創教出版職員、築港ARCスタッフとインターンなど、揃っての宴。
- 28日・年末大掃除。創教出版職員と應典院スタッフが揃って院内をピカピカに磨き上げる。
- 29日・アートマネジメント学会振り返り会議。休館の應典院で。
- 31日・大蓮寺、除夜の鐘。

1月

- 5日・應典院2008年しごと始め。大蓮寺本堂において秋田光茂先代による法話。その後は大蓮寺関連のバドマ幼稚園・創教出版出版職員を含め総勢40名による互礼会にスタッフ揃って参加。
- 8日・築港ARC月間会議。
- 11日・ハヤシエリ展「HAPPY5」を皮切りに、コモンズフェスタがスタート25日まで。出張講義「アートマネジメントの理論を実践」では創創ト社主宰としてを城田邦生先生が主幹の講義で話題提供。
- 12日・てれれ上映会一日目。
- 13日・てれれ上映会二日目。
- 15日・東京から「彼岸寺」のスタッフヒアリングで来訪。本若流殺陣塾の第1回目。
- 17日・月例会。震災13回忌法要。
- 18日・橋口譲二さんが古々に来訪。本若流殺陣塾の第2回目。
- 19日・ハヤシエリさんによるちぎり絵ワークショップ開催。太田浩司展「マイ・プライベート・サニー」25日まで。築港ARCアークコンピスベシヤルを應典院で開催。コミュニティセッションについて語り合うひととき。
- 20日・ちぎり絵ワークショップでは、親子やカップル、仕事仲間など多くの方が参加。映画おしゃべり会新春スペシャルでは、上映とおしゃべりで盛り上がる。
- 22日・本若流殺陣塾の第3回目。
- 23日・城田邦生率いる創創ト社with LOWPOWERS「ラジオスターの悲劇」crossion」25日まで。創創ト社が劇団として行うラスト公演。待ちかねたファンたちで満員御礼。
- 25日・本若流殺陣塾の第4回目。創創ト社千秋楽終了後に、気づきの広場にてコモンズフェスタクロージングトーク開催。
- 26日・京都市景観・まちづくりセンターの学生まちづくりコンペ。主幹が審査員を勤める。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

※第3木曜日 18:30～20:30
参加費 会員・学生 700円 / 一般 1,000円

第77回 5月15日(木)
「ありのままの自分を受け入れる」

8歳のときに事故で両腕を失い、養護学校で口、足、肩を使って生活訓練。今は亡き口筆画家、大石順教尼に師事され、口での描画と生き方の修行を始めネパールに学校を贈る運動や少年院慰問など社会への貢献をも実践中。

話題提供者：南 正文さん
(世界身体障害芸術家協会会員・日本画家)

第78回 6月19日(木)
「死なないでください」

死にたくなる気持ちに自殺防止センターのボランティアは年中無休でじっと耳を傾けています。死にたい人を前にした時、あなたはどのようにしますか？

話題提供者：澤井 登志さん
(国際ビフレンズ・大阪自殺防止センター)

第79回 7月17日(木)
「真帆～あなたが娘でよかった～」

真帆さんは12歳のとき悪性脳腫瘍にかかり20回にも及ぶ手術を繰り返し20歳で亡くなりました。自分が多くの方の愛をいっぱい受けていることに感謝し、自分が前向きに生きることがたくさんの愛への恩返しだ、と明るく周りの人を励まし、医師を目指して手術直前でも勉強をされていました。

話題提供者：内梨 昌代さん
(大阪市立汎愛高校教諭)

※会員のみなさまにおしらせ
○今年度の会員のつどいは、6月15日(日)午前11時の予定です。

アートNPOのサポート施設
築港 ARC (アートリソースセンター by outenin)

アートの視点から社会を見つめるトークサロン
ARC トークコンプレッション

関西で活動されているメディア・福祉・教育・環境・医療・食・地域づくりなど、多彩な分野においてクリエイティブで実験的なプロジェクトやスペースを紹介する場です。日常生活に何気なく潜む、ステキな表現のかたちを、ゲストとともに語り合ってみませんか？なお、トークの内容は音声にて完全収録し、ポッドキャスト番組(インターネットラジオ)にて公開しています。過去の番組も聞くことができます。

<関西アート情報ポッドキャスト「ARC Audio!!」>
http://webarc.jp/arc_audio/

○参加費 1,000円 (お茶・資料代)
○時間 18:00～20:00
※終了後ささやかな交流会があります
○会場 築港 ARC (piaNPO 308号)

#13 4月12日(土)「地域に仕掛けるアクティビティ～伊丹編」
○ゲスト 中脇 健児さん
[(財)伊丹市文化振興財団]

#14 5月24日(土)「アーティストとつくる学校教育～教員の立場から」
○ゲスト 糸井 登さん・藤原 由香里さん
[京都府宇治市立平盛小学校教諭]

#15 6月28日(土)「中学・高校生に伝えるフリーペーパーの可能性」
○ゲスト 高橋 誠さん
[NPO 法人芸術活動推進プランユノー / イラストレーター「makomo」]

#16 7月26日(土)「人間観察から始めるコミュニケーションアート」
○ゲスト みずみたまんさん
[コミュニケーションアートユニット]

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com

應典院寺町倶楽部の
ニューズレター

サリュ
Vol.55

<次号 56号は…>

2008年7月発行予定

「サリュ、大リニューアル！」
A4版から始まって、A5版になったサリュ。会報という性格からニューズマガジンへの変化を遂げるための刷新でした。このたび、10年を経て、新たに判型も、そして性格もリニューアル。少々「はやり」のフリーペーパー風に、抜本的に改めます。タブロイド判で隔月発行の新生サリュ、ご期待くださいませ。

■発行日
2008年3月31日
■発行人
秋田 光彦
■編集人
山口 洋典
■スタッフ
池野 亮光
城田 邦生
塩根 春華
森山 博仁
朝田 亘
■発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
E-mail info@outenin.com
URL <http://www.outenin.com>

編集後記

口に十年と言っても、そこにはさまざまな関わり方や想いがあります。私個人にとっては、演劇という側面から應典院を見続けた十年でした。それはそれで、大きな意義と価値があったと思います。が、ここからは演劇だけではなく別の角度から應典院の姿を見つめて行く年月にして行かねばならないと感じています。(城田)

の春より應典院ブログを卒業し、「サリュ」も卒業する運びとなりました。應典院と幼児教育を手がける創教出版の一元化を進めるということで、出版社のお仕事もすることに…。もちろん應典院とのご縁が無くなった訳ではありません。今後も應典院にはおりますので引き続きまして、宜しくお願いいたします。(塩根)

私の好きな言葉の一つは、「努力に勝る才能は無い」です。サリュに携わり自分の欠点なども知りました。物事を進める集中力、瞬発力など…日々精進し続ける事の再確認の時間だったような気がします。(森山)

先般、風邪をひいてしまいました。しかも原因がまったくわかりません。いつもだったら「ああ、風呂上り外出したから」とか、なんか思い当たる理由があるもんなんです。風邪をひく前日は、完全に休んでいたのになんでなんだろうなあ…と、ちょっとショックを受けてしまいました。4月以降は、気持ちも身体もすっかり入れ替えて、築港 ARC プロジェクト ver.2008、スタートさせます。(朝田)

復刻版シリーズ、第4段は、A5版時代のものです。次号案内(本ページ左上)にも記しましたが、最早、このデザインも復刻版という位置づけです。次号から大幅リニューアルをすることになったためです。ちなみに年度末には自転車で事故。まさに「急がば回れ」と痛感したと同時に、ゆとりって大事だなと実感しました。(山口)